Tokyo Gakugei University Repository
東京学芸大学リポジトリ
http://ir.u-gakugei.ac.jp/

Title	昭和戦前期の新潟県下越地方における中等教育と在野研究 : 金塚友之丞の地理教育と民俗研究を事例として（論説）(fulltext)
Author(s)	岩野,邦康
Citation	学芸地理(71): 39-56
Issue Date	2016-02-18
URL	http://hdl.handle.net/2309/145215
Publisher	東京学芸大学地理学会
Rights	

学芸地理 71号 2016年 pp.39-56

昭和戦前期の新潟県下越地方における中等教育と在野研究
－金塚友之丞の地理教育と民俗研究を事例として－

岩野 邦康*

キーワード：地理教育，中等教育，在野研究，民俗学

Ⅰ はじめに　課題と方法

本稿は金塚友之丞[1]の昭和戦前期の活動を通して，この時期の新潟県下越地方における中等教育と在野研究の関係を明らかにすることを目的とする．

１．金塚友之丞の業績の現在的評価

金塚友之丞が遺した調査研究の成果は，現在でも新潟県下越地方を対象とした諸研究，さらには研究の成果を社会へ普及する市町村史誌編纂事業や博物館の展示などの社会教育事業にも大きな影響を与えている．金塚の業績がいまもなお影響を与えている研究分野には下記のようなものがある．

民俗学：金塚の主著『蒲原の民俗』に詳述された蒲原低湿地の農耕文化の研究

考古学：牡丹山諏訪神社古墳の発見につながる戦前期の下越地方の表面採集調査の成果

歴史学：戦前期の平安越後古図(康平図・寛治図)の研究

民俗学では金塚の主著『蒲原の民俗』(金塚，1970)は，日本の低湿地文化を研究する上で欠くことのできない著作と評価されている．特に新潟県下越地方の平野の景観や耕地を一変させた1922(大正11)年の大河津(おおこうづ)分水通水以前を聞き書き調査の対象とし，その時代の湛水田における稲作農耕を研究的な視点から考察した研究は，本書にまとめられた金塚の調査研究以外にない[2]．

金塚の業績はこの地域の博物館・資料館の調査研究や展示に影響を与えている．低湿地文化をめぐる研究は新潟市歴史博物館をはじめ下越地方平野部の歴史博物館，資料館の調査研究や展示の各所で援用されている[3]．またこの地域で刊行された市町村史誌の近世史・近代史・民俗の各分野にも金塚の研究成果は大きな影響を与えている．

考古学の分野では，新潟市歴史博物館所蔵の金塚友之丞資料に含まれていた金塚が表面採集した円筒埴輪と思われる土器片に「牡丹山」と墨書されていたことをきっかけに，市民による資料調査，新潟大学考古学研究室の現地調査が行われた．これらの動きは2014(平成26)年の牡

＊新潟市立新津鉄道資料館

丹山諏訪神社古墳(新潟市東区)の発見につながった.

平安越後古図の研究については，近年，新潟大学の堀健彦らの研究プロジェクト(堀，2008，2010)や新潟県立歴史博物館の調査研究[4]が進んでおり，これらの中では金塚は昭和初年代に平安越後古図の真偽をめぐる論争が生じた際に偽作説を主張していた研究者であったことに言及されることが多い.

上述のように金塚の業績は多分野で参照され影響を与え続けている．一方で昭和戦前期から戦後にかけて金塚がこれらの研究を展開できた時代背景や研究環境などについてはほとんど知られていない.

金塚は明治末から昭和30年代まで，新潟県内各地で教鞭をとった教員であり，生涯を通して一度も大学などの研究機関に勤務することのなかった在野の研究者であった.

金塚が明治末より新潟県内各地の小学校の教員としてのキャリアをスタートし，1925年に中学校の地理教師に転じて柏崎中学，新発田中学に赴任，さらに北越商業学校(現北越高校)に移ったことは,『蒲原の民俗』に付された著者略歴などに記されている．また金塚の単著の書誌や膨大な雑誌掲載論文・記事によって調査研究活動の概要もあきらかとなっている(第1表).しかし教員としてキャリアを重ねながら，どのように調査研究の理論や方法を学び，研究を展開していったのかについては長く不明であった.

金塚の研究が同時代的にひろく知られるようになったのは，1935(昭和10)年に，雑誌「高志路」に平安越後古図偽作説を主張する「康平図・寛治図偽作論」(金塚，1935b・c・d)を発表

第1表 刊行物記載の略歴などによる金塚友之丞の経歴

西暦	和暦.月	満年齢	出来事
1890年	明治23年3月	0	北条村大字東長鳥(現柏崎市)に生まれる. その後，４年課程の小学校卒業後，徴兵検査まで農業に従事.
1910年	明治43年	20	独学で教員試験に合格，吉井小学校に着任. 以後，県内各地の小学校を転任.
1925年	大正14年	35	中学校へ転じる．柏崎中学校勤務.
1932年	昭和7年	42	新発田中学校に勤務.
1935年	昭和10年	45	雑誌「高志路」に「康平図・寛治図偽作論」を発表(6～8号).
1937年	昭和12年	47	『新発田概論』をまとめる(新発田中学校の雑誌に特別会員として3年にわたって投稿した論考をまとめたもの).
1939年	昭和14年	49	新発田中学校から北越商業学校に移る．地理科を教える.
1941年	昭和16年	51	『遠藤七郎』を郷土研究社(新発田町)より刊行.
1953年	昭和28年9月	63	雑誌「高志路」再刊に尽力する. 1970(昭和45)年まで継続して蒲原低湿地帯に関する論考などを投稿(第145～220号).
1961年	昭和36年	71	北越商業高校退職.
1963年	昭和37年4月	73	『鎧潟周辺の民俗』が巻町双書から出版される.
1966年	昭和41年	76	『鎧潟：鎧潟干拓地域民俗資料緊急調査報告書』出版 ．金塚「村むらにおける農耕習俗」を担当.
1966年	昭和41年	76	『鎧潟と田ブシン』巻町役場より出版.
1970年	昭和45年12月	80	『蒲原の民俗』が野島出版から出版される. 雑誌「高志路」で継続して発表した蒲原低湿地帯の記事を新潟県民俗学会の関係者が一冊にまとめ刊行.
1971年	昭和46年3月	80	逝去.

岩野作成

したことによる．当時新発田中学の地理教師であった金塚は，遺物や遺跡の出土状況を面的に把握した上で，実証的な方法で平安越後古図が後世に想像で描かれたものである可能性が高いことを主張した．

2015年現在から整理された研究史を俯瞰すると，実証的な方法を採る金塚の論考の登場は，従来の研究を新しい知見で更新していく学問研究の一般的な進展のように映る．しかし当時の在野の調査研究をめぐる環境に注目すると，よりダイナミックな変化の中で金塚の研究が登場してきたことが浮かび上がる．

金塚が偽作説を展開した「高志路」は，郷土史をテーマとした同人誌であったが，書店で販売される商業誌としての性格もあわせ持つ雑誌で，1935年1月に創刊されている．創刊者である小林存[5]は，新雑誌の新しい世代の書き手として金塚をスカウトしている．また金塚以外の「高志路」創刊期の寄稿者の経歴も多彩であった．「高志路」の創刊に象徴されるように，この時期に新潟県下越地方における在野の研究をとりまく環境は大きく変化していた．

広く学術，特に人文社会科学系の学問研究の振興をはかる上で，専門的な研究機関以外にも社会の各所に厚い在野の研究者層が存在していることは望ましい．それぞれの時代の在野の研究者をとりまく研究環境について考えることは，現在の学問研究を考える上で大きな意味を持つ．在野の研究の場合，大学や研究機関などにポストを持つフルタイムの研究者による研究に比べ，研究を可能とする環境が地域や時代ごとの個別性を持つ．そのため研究の背景を探るためには，地域や時代，さらにはそれぞれの関係者個人が持つ固有の特徴や状況について詳細に見ていく必要がある．

筆者はこのような問題意識のもと，現在は民俗学者として知られる小林存の大正期～昭和初年代のジャーナリスト，文筆家としての活動について整理した(岩野，2013)．また2011年，2012年に，当時勤務していた新潟市歴史博物館の市民向け講座で昭和戦前期の社会教育事業や在野の研究者の研究環境について発表した[6]．

本稿では，まずこれまであまり知られていなかった金塚の教員としての履歴を整理する．そしてそれらを踏まえた上で，金塚の在野の研究者としての業績を改めて見通し，背景にある新潟県下越地方における昭和戦前期の在野の研究者の研究環境を探ってみたい．

２．新潟市歴史博物館所蔵金塚友之丞資料の概要

このような作業が可能になったのは，2010年に金塚友之丞の遺族から新潟市歴史博物館に寄贈された金塚友之丞資料(以下，金塚資料)によって，関係資料の状況が大きく変化したためである[7]．

金塚資料は，段ボール箱，軟式野球のボールの空き箱，菓子の空き箱，木箱など50箱近い箱に収納された状態で寄贈された．現在まだ資料整理中であるが，民俗調査関係のメモ綴・ノート類，新発田藩関係の絵図の模写，出土遺物，新聞の切り抜きなど多分野にわたる資料が含まれている．金塚が新潟県各地の学校に勤務するため転居を繰り返していたせいだと思われるが，資料の多くは1937年に転居した新発田中学時代から,次の北越商業学校時代のものが多く，それ以前の勤務校に関係する資料は少ない．

本稿の対象となる資料は，多岐にわたる資料のうち，雑誌の抜き刷りや原稿用紙，メモを綴りひもで綴った膨大な資料の中に含まれていた．これらによってこれまで知られていなかった金塚の教員としてのキャリアを探る手がかりが大幅に増加した．

Ⅱ 中等教育の地理教師へ―金塚友之丞の教員としてのキャリア

先に第1表に示したように，金塚が独学で小学校教員の資格を取得し学校現場で働きながら教員としてのキャリアを形成していたことは，金塚の略歴や研究者紹介などで明らかになっている．ここでは金塚資料に含まれていた金塚が記した自身のキャリアに関係する資料を見ていく．金塚資料の中で教員としてのキャリアについて網羅的に記されている資料は以下の二つのメモである．

メモＡ：勤務校と勤務年が記されたメモ．使用された封筒の表側に万年筆，赤鉛筆，青鉛筆でメモ書きされたもの(第2表)．

メモＢ：出生年からのはじまる個人史年表的なメモ．ポスターを裁断して裏側の白紙側をメモ帳とした綴りに，万年筆でメモ書きされたもの(第3表)．

これらのメモの記述に加えて，官報や新潟県が刊行した明治末～昭和戦前期の教育関係の雑誌記事，職員録などの断片的な記録とメモの記述内容を照合し，金塚の教員としてのキャリアをより詳細な形で明らかにする．

１．初等教員としてのキャリア

金塚は『蒲原の民俗』の著者略歴で「4年課程の小学校卒業後，徴兵検査まで家業の農事に従う.」と述べている．メモＢには，1900(明治33)年の行に「尋四卒　数え年11才」とある．おそらく，出身地である東長鳥にある尋常科東長鳥小学校に1897年から1900年にかけて通っていたものと思われる[8]．メモＢには，1904年(数え15才)の行に「若衆入団」とあることから，この時期の金塚が農村の青年として過ごしていたことがうかがえる．

メモＡによれば1910年3月には最初の赴任校

第2表 金塚資料に遺された金塚友之丞の経歴メモＡ

西暦.月.日	和暦	校名	職名	市町村名	現在の名称
1910.3.31	明治43年	吉井小学校	訓導	刈羽郡中通村	柏崎市立吉井小学校(廃校)
1911.3.31	明治44年	吉井小学校		三島郡深才村	
1911.4.18	明治44年	才津尋常高等小学校	訓導		長岡市立才津小学校
1916.10.20	大正5年	福多尋常小学校	訓導		栄村立福多小学校
1916.10.26	大正5年	福多実業補習学校	訓導		
1918.3.31	大正7年	一ノ木戸尋常小学校	訓導	南蒲原郡三条町	三条市立一ノ木戸小学
1920.3.31	大正9年	下條尋常高等小学校	訓導	中魚沼郡下条村	十日町市立下条小学校
1925.6.30	大正14年	下條尋常高等小学校			
1925.6.20	大正14年	柏崎中学校	教諭心得	刈羽郡柏崎町	柏崎高校
1930.12.24	昭和5年	地理科免状			
1931.2.15	昭和6年	柏崎中学校	教諭		
1932.12.31	昭和7年	新発田中学校	教諭	北蒲原郡五十公野村	新発田高校
1939.12.31	昭和14年	新発田中学校			
1939.12.31	昭和14年	北越商業学校	教諭	新潟市流作場	北越高校
1959.3.31	昭和34年	北越商業学校			
1959.4.1	昭和34年	北越商業学校	講師		
1961.12.31	昭和36年	北越商業学校			

注)市町村名は，『新潟県学校職員録』『新潟県学事関係職員録』より補記した．

金塚友之丞資料(新潟市歴史博物館蔵)岩野より作成．

第3表 金塚資料に遺された金塚友之丞の経歴メモB

西暦	和暦	数え年	事項
1890年	明治23年	1	3月14日生
1900年	明治33年	11	尋四卒数え年11才
1904年	明治37年	15	若衆入団
1910年	明治43年	21	吉井校
1911年	明治44年	22	才津校
1917年	大正6年	28	福多校
1919年	大正8年	30	一ノ木戸校
1921年	大正10年	32	下條校
1925年	大正14年	36	6月30日柏崎中学校教諭心得
1931年	昭和6年	42	2月15日柏崎中学校教諭
1932年	昭和7年	43	12月31日新発田中学校教諭
1939年	昭和14年	50	12月31日新発田中学校退職
1940年	昭和15年	51	北商教諭
1961年	昭和36年	72	北商講師退

注)紙面の都合で空欄行は省略した.

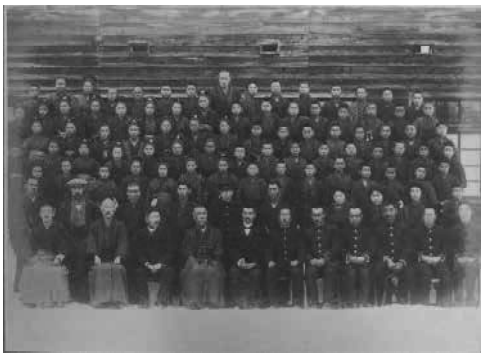
金塚友之丞資料(新潟市歴史博物館蔵)より岩野作成.

である吉井小学校(刈羽郡中通村吉井小学校・現柏崎市)に訓導として赴任している.

1910年1月の「越佐教育雑誌」205号に掲載された記事「教員検定成績発表」の「尋常小学校本科正教員」の項に金塚の名が記されていることから，この年の1月に検定試験に合格し教員の資格を取得したことがわかる(越佐教育雑誌，1910).

金塚はその後，才津尋常高等小学校(三島郡深才村・現長岡市)，福多尋常小学校(南蒲原郡福島村・現三条市)，一ノ木戸尋常小学校(南蒲原郡三条町・現三条市)，下条尋常高等小学校(中魚沼郡下条村・現十日町市)に勤務する．メモ A・B では，福多，一ノ木戸，下条の3校の勤務期間がずれているが，記載内容からメモ A が正しいものと推測される．下条校を最後に，金塚は1925年に柏崎中学校に移る.

初等教員としての金塚の活動に関連する資料は金塚資料にはほとんど含まれていない．金塚が作成した教材として，一ノ木戸尋常小学校時代に作成された「郷土誌材料」と，下条小学校時代に作成された「最近史」などがある．前者は一ノ木戸尋常小学校の周辺にある人物・旧跡・寺社などについて筆写した和紙のメモを綴った帳面で，後者は第一次世界大戦前後のヨーロッパの情勢を藁半紙に謄写版印刷で刷り，彩色した帳面である．教材のほか，一ノ木戸校と下条校時代の集合写真(第1図)がいくつか遺されている.



第1図 下条尋常高等小学校時代の集合写真.
前列右から6人目が金塚友之丞
(新潟市歴史博物館所蔵)

2．中等教員としてのキャリア

金塚はどのように中等教員の資格を取得したのだろうか.

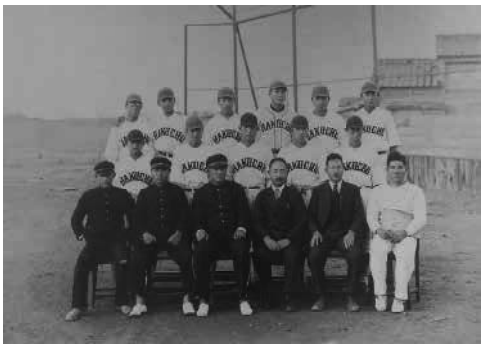
戦前の教育制度では中等教員の資格を取得す

る方法は，高等師範学校や女子高等師範学校などの教員養成機関制度のほか，高等教育機関卒業生を対象とする「無試験検定」の制度と「文検」（正式名称は「文部省師範学校中学校高等女学校教員資格試験」）制度があった（寺崎・「文検」研究会編，1997，p. 27）．文検制度は中等教育機関の教員供給を支える役割を担い，戦前期の教員養成の柱のひとつであった．

金塚が中学校の地理教員に転じた経緯はこれまで明らかでなかった．本稿執筆にあたっての調査で「第53回師範学校，中学校，高等女学校教員検定本試験合格者」（1930年実施）の地理科の項に「金塚友之丞」と記されていることが判明し（文部省，1931，p. 63），金塚も文検制度を利用して地理教員の資格を取得したことがわかった．

文検制度と地理学・地理教育の関係について論じた佐藤由子は，1割程度の合格率しかない難関である文検を受験するために，雑誌や参考書の購読など独特の受験文化があったことを指摘している（佐藤，1988）．金塚資料からは金塚の文検受験に関係する参考書や書類などの資料は現在のところ見つかっていない．

先掲のメモＡによれば，金塚は1925年6月30日に柏崎中学校に赴任してる．赴任当初の職名は教諭心得で「新潟県学事関係職員録」（越佐教育雑誌社編，1926）によれば，金塚は地理と歴史を担当していた．メモＡには柏崎中学校赴任後の1930年に「地理科免状」とあり，柏崎中学校に移った後数年間は，免許を未取得であったため，教諭心得という職名であったものと思われる．佐藤は，1920年代に高等女学校・中学校などの中等教育機関が急増し，教員の供給が間に合わないという状況が発生していたため，資格を持たない教員が増えたことを指摘している（佐藤，1988，pp. 20-21）．新潟県でも1925年前後は，中等教育機関の拡充期にあった（新潟県教育百年史編さん委員会・新潟県教育委員会，1973，p. 582）．金塚が中学校の教員免許を取得する前に，教諭心得という職名で赴任することが可能であったのは，新潟県下の中学校の教員不足があったのではないかと推測される．



第2図　柏崎中学校野球部の集合写真
右から2番目が金塚友之丞
（新潟市歴史博物館所蔵）

金塚資料に含まれる柏崎中学校時代の資料は少数であり，野球部の集合写真などが確認されているにすぎない（第2図）．少ない資料の中で注目されるのが，金塚在任時の二人の校長である．

金塚が赴任した当時の校長である高橋林吉は，のちに北越商業学校の初代校長となっており，次の校長である柿沼彦吉は，新発田中学校の校長に転じている．当時の教員の異動に関する事情は不明であるが，柏崎中学時代に培った人的つながりが，その後のキャリアになんらかの影響を与えた可能性はある．

1932年，金塚は柏崎中学から新発田中学へ移る．「新潟県学事関係職員録」によれば新発田中学では地理の他に鉱物を教えていた．新発田中学時代の金塚は「新潟県立新発田中学　学友会雑誌」などの新発田中学校関係の雑誌や，新発田新聞といった地元の活字媒体に盛んに寄稿し始める．前者には着任一年目の研究状況をエッセイ風にまとめた「巡礼余談」や新発田の地誌をまとめた「新発田概論」があり，後者には

聞き書き調査や文献調査をまとめた「郷土余談」がある．「郷土余談」は新発田中学の生徒らと共同名義で新発田新聞に連載形式で発表している．後段で検討するが，発表時期の前後関係から，新発田中学校関係の雑誌に1933年から1934年に掲載した文章が，当時新潟県内に読者を持つ新聞雑誌で文筆活動を行っていた小林存の目にとまり，「高志路」創刊時の寄稿者としてスカウトされることにつながったと推測される．

金塚が新発田中学に移った時期は，1929年の新発田町図書館の開館や，新発田中学校の地歴研究会が発展した新発田郷土同好会の活動など新発田の地域研究が活発になっていた時期であった．新発田中学校で金塚の同僚であった歴史教師の新井寛励や，地元の郷土史家である三扶誠五郎[9]など，在野の研究者の活動も活発であった．新井は金塚と同じく独学で初等教員の資格をとり文検受験を経て中等教員となった人物であり，この時期の新潟県の在野研究者と文検の受験経験とを考える上で興味深い．

1939年，金塚は新発田中学から新設の実業学校である北越商業学校 へ移る(第3図)．北越商業学校は1936年に乙種商業学校として開校した新しい学校で，校舎は流作場(新潟市中央区)に設けられた．開校にあたっては出資した実業家の和田喜一郎と新潟市教育課長であった高橋林吉(のちに初代校長となる)が尽力したという．金塚の異動に際しては，柏崎中学時代に人的つながりがあった高橋林吉の勧誘があったと考えるのが妥当だろう．

金塚は「新潟県学事関係職員録」によると北越商業時代には，地理のほか，歴史，公民を教えていた．金塚は教員生活を終えるまで本校に勤めた.在任期間は勤務校の中で最も長かった．金塚の低湿地研究の調査の過半は，北越商業時代に行われたものと考えられる．

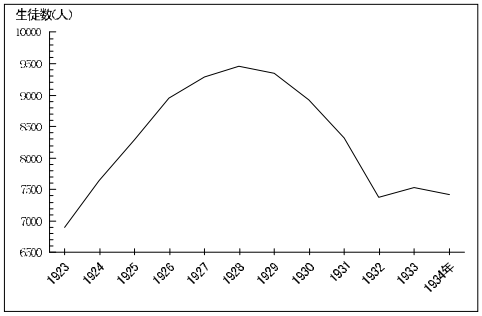
金塚資料には，柏崎中学，新発田中学，北越商業時代に生徒に書かせた作文や，教材として使用したと思われる彩色された地形図，謄写版印刷のプリントなどが含まれている．特に新発田中学時代に作成したと思われる近世の絵図の写しが大量に残されているのが注目される．金塚が中等教員として具体的にどのような地理教育を行っていたかを詳細に知るためには，これらを分析する必要があるが，それはまた別の機会としたい．

第3図　北越商業学校で教鞭をとる金塚友之丞
北越商業学校は，その後5年制の甲種商業学校となり，戦後は商業高校となった．現在の北越高校．
(新潟市歴史博物館所蔵)

３．金塚のキャリア形成と時代背景

金塚の教員としてのキャリアの時代背景はどのようなものであっただろうか．新潟県の教育史と照らし合わせると金塚が大きくキャリアを転じた時期は，県内に新しく教員の需要が発生した時期にあたっている(第4図)．

金塚が教員としてのキャリアをスタートした



第4図 新潟県中学校生徒数増減推移
新潟県教育百年史編さん委員会編(1970):『新潟県教育百年史　明治篇』, p. 582掲載表より岩野作図.

1910年前後は，1907年に義務教育年限が2年延長され，翌年より施行されたため，教員不足が深刻化していた時期であった．金塚が小学校教員になるため検定試験を受けた1909年には，尋常小学校正教員および准教員の資格を得るための講習会が開催されるほどであった(新潟県教育百年史編さん委員会・新潟県教育委員会，1970，p. 661)．新潟県では，明治中期には就学率が他の地域に比べて低く政策としてしばしば教育振興策が採られた．これらの施策は県内の教員の需給バランスにも影響を与えた．

金塚が柏崎中学校に転じた1925年前後の時期も，新潟県下で中等教育機関の拡充がはかられていた時期にあたる．さらに1939年の北越商業学校への転職も，新設校に新しく生まれたポストへの異動である．

独学で小学校の教員の資格を得た金塚が，中等教員へ転じ，さらには実業学校へと移ることができた背景には，本人の資質や努力のほか，教員の需要が増え続けた新潟県の事情があったと考えられる．金塚と同じく「高志路」創刊時に寄稿した中等教育関係者のうち，わかっているだけでも，先に挙げた新井寛励のほか，後述する歴史教師の齋藤秀平，地理教師の松谷時太郎らが文検合格の後に中学校に転じている．

第5図 新潟県立図書館(明治記念県立図書館)
(新潟市歴史博物館所蔵)

Ⅲ 在野の研究者として—昭和戦前期の研究環境

ここでは金塚の調査や研究の背景にあった環境について整理する．金塚が研究の成果を雑誌などの刊行物を介して発表しはじめるのは1932年に新発田中学校へ赴任して以降である．その背景には新潟県下越地方で大正期以降に培われてきた在野の学術研究をめぐるさまざまな動きがあった．これらの事情を考慮して，対象とする時期は大正期から昭和戦前期とする．

1．大正期～昭和戦前期の下越地方の学術をめぐる環境

1)社会教育(通俗教育)

この時期，下越地方ではそれまで他県などに比べて遅れていた社会教育(通俗教育)の施設・機関が徐々に整備された．1916年12月には新潟県立図書館(明治記念県立図書館)[10]が開館した(第5図)．当時の県立図書館としては充実した蔵書群を持ち，特に日本史部門の充実が特徴的であったという．この図書館は，一般的な図書館業務のほか,下記のような事業を行っていた．

1. 巡回文庫経営
2. 明治天皇史料収集(山中樵編，1924)．
3. 郷土資料の収集(歴史資料のほか，蒼軒文

庫，富山文庫など)

4. 各種図書館連携事業

5. 講演会・展覧会など

これらの事業のほか，新潟図書館では高橋義彦の「越佐史料」を頒布する越佐史料頒布会の事務，新潟県史編纂委員会の事務(1933～1939年)なども行っていた(新潟県立新潟図書館，1965)．

初代館長の山中樵[11]はこの図書館の建設のため司書として招かれた人物で，図書館長を勤めたほか，社会教育(通俗教育)や後述する『新潟市史』の編纂を推進した人物でもあった(山中編，1979)．二代目の館長の村島靖雄も帝国大学卒業後,図書館畑を歩んできた人物であった．両者ともに在野の歴史研究に大きな役割を果たしている．

下越地方では，県立図書館が開館した後，新津市立記念図書館(1925年)，新発田町図書館(1929年など市町村の図書館が開館した．新発田町図書館は図書だけでなく旧新発田藩の歴史資料を所蔵した．

図書館の整備のほか，大正から昭和にかけて郷土博物館を建設しようという機運が高まった．1914年の新潟市教育会の建議などを経て，昭和に入ると小学校や各種中等学校において郷土教育が盛んになり，1932年には新潟県教育会主催の郷土教育研究会において，郷土博物館設立の建議を行うことが決議され県会においても満場一致で郷土博物館の設立が決議された．その後も県中等学校長会，新潟市から新潟県への要望が出された．

このように待望された郷土博物館は，1933年に県会議事堂の保存運動[12]と合流し,中野財団[13]の出資により設立されることとなった(第6図)．

博物館の開館にあたっては助成のため，県内各学校職員・生徒・児童の有志者より募金され

第6図 新潟郷土博物館
(新潟市歴史博物館所蔵)

た3798円余が中野財団に寄付された[14]．設立に際して1933年4月に下記のメンバーで陳列品の蒐集，館内設備の検討会が開催された(松谷時太郎編，1941)．学校関係者のうち2名が中等教育機関の長であった．

〔新潟県〕：小田学務部長，安田学務課長，田中社会課長

〔新潟市〕：高橋新潟市教育課長(高橋林吉)

〔図書館〕：村島県立図書館長(村島靖雄)

〔教育関係者〕：小野県教育会会長，薄田県教育会幹事

〔学校関係者〕：島田新潟師範学校長，手塚三条中学校長，斎藤小千谷高等女学校長(齋藤秀平)，五十嵐新潟市沼垂小学校長

開館にあたっては，館長に斎藤秀平(前小千谷高等女学校長．県史編纂員．歴史的資料の選択を担当)，主事に松谷時太郎氏(前六日町中学教頭．地理的資料担当)が任命された．『越佐人物誌』によれば齋藤，松谷ともに文検を経て中等教員になった経歴を持つ(牧田編，1972a，1972b)．両者とも「高志路」創刊時の寄稿者であった．

2)市史編纂事業

大正～昭和戦前期の新潟県では，社会を大きく変える土木事業が行われた．大河津分水工事

(1909～1922年通水)，新潟築港工事(1917～1926年)など大型の土木工事が進捗し，農村部，都市部ともに景観が大きく変化しつつあった．それまで強湿田が広がっていた広大な蒲原平野の景観に変化が生じたことや，近世初期より信濃川左岸側にあった港湾機能が新潟築港によって右岸側に移転したことは，歴史や民俗に関心を持つ知識人や教育者たちに歴史叙述や記録作成の強い動機を与えた．

新潟市役所には市の一大プロジェクトとして1926年に市史編纂部が設けられ，1934年に『新潟市史』上下巻が刊行されるまで市史編纂事業が行われた．時代背景としては，当時の全国的な郷土への関心の高揚のほか，新潟築港によって従来の新潟湊,新潟町の景観や機能が失われ，その記録を残しておかなければならないという使命感があったものと思われる．新潟市史編纂の関係者は，県立図書館系のスタッフ(山中樵，藤田福太郎，村島靖雄)と，地元で活動していた地域研究者や文筆家(高橋義彦，佐藤荘松，鏡淵九六郎)，さらには政治家(八木朋直，斎藤巳三郎)，新聞関係者(山田穀城)など多彩な顔ぶれであった．

『新潟市史』の刊行と新潟郷土博物館はどちらも1934年であり，その翌年の1月には両者の関係者も数多く寄稿する「高志路」が創刊する．

３)印刷メディア

大正期には新聞・雑誌などの印刷メディアの動きが活発であった．明治30年代以降，新潟県内の新聞各紙は商業紙としての性格が強くなっており，文化欄の充実など読者獲得に向けて紙面を工夫するようになっていた．また，小林存が深く関係した週刊紙「東北時報」のように新たに創刊される新聞雑誌もあった(岩野,2013)．

新発田では，「新発田新聞[15]」が金塚や新発田中学の生徒らに調査研究の成果を発表する場を提供した．また三扶誠五郎は郷土研究社を起こし，新発田藩関係の史料の復刻事業を精力的に行った．

印刷メディアが多様化することにより，機関や学校，さらには居住地をこえて下越地方の在野の研究者達の活動や交流も盛んになった．こういった動きの中に次に見る1935年の「高志路」の創刊は位置づけられる．

２．雑誌「高志路」と1935年前後の在野研究者

「高志路」の主宰者，小林存は，現在は新潟県の民俗学を主導した民俗学者として語られるのが一般的である．また，新潟県内の新聞の歴史を語る際に，「新潟日報」の前身である「新潟新聞」の主筆を日露戦争期に勤めた明治の新聞人として注目されることもある．

筆者は大正期から昭和初年代にかけて，小林存が週刊紙「東北時報」においてジャーナリスト,文筆家として活躍していたことに注目し(岩野，2013)，「高志路」創刊に「東北時報」が関係していたことを指摘した．

「高志路」は「東北時報」の記者である松木末吉が1934年6月に，新潟市の安藤文平宅で古老の座談会を企画開催し，そのメンバーを核に1935年1月に創刊されたという経緯を持つ．「東北時報」の1935年の記事を見ると「高志路」の宣伝や紹介記事が掲載されており，両者が密接な関係であったことがうかがえる．

後年，新潟県民俗学会の機関誌となる「高志路」は，創刊当初は民俗的なテーマに限らず，バラエティ豊かな郷土史の論考が寄稿される月刊誌であった．寄稿者も，柳田国男，宮本常一などの民俗学関係者のほか，新潟県内の政治家や実業人，あるいは長く郷土史家として活躍してきた人物など幅広かった．県立図書館長の村島靖雄や新潟市史編纂に携わった藤田福太郎らも寄稿している．

小林は，明治30年代から昭和初年代にかけて

ジャーナリスト，文筆家として活動しており，新潟県内の政界や実業界，知識人などに人脈を築いていた．またすでに幅広い読者を獲得していた，名を知られた文筆家でもあったため，多様な書き手に寄稿を依頼することができたのだろう．

「高志路」創刊時の寄稿者のうち，教育関係者に注目すると，齋藤秀平，松谷時太郎ら新潟郷土博物館の職員のほか，新発田中学の歴史教員である新井寛励や，神田喜代太郎(元新潟高等女学校教諭)，山本与一郎(元新潟商業教諭)，長谷川正(新潟商業教諭)など中等教育の教員，初等教員の名がある．また，中学校や高等女学校の生徒，卒業生も寄稿している．

新潟県の郷土史関係の総合誌といった性格で創刊された「高志路」は，同じ年の10月に機関誌「民間伝承」を創刊し全国組織である民間伝承の会を設立した柳田国男が主宰する民俗学に急速に接近し，徐々に民俗学を中心とする雑誌へと方向を変えていく．寄稿者も民俗学に関心を持つ研究者に変化していった．金塚の調査研究も，は平安古絵図論争が収束したのち，民俗調査で得た資料を誌面で発表していく活動が中心となる．

３．金塚の調査研究と印刷メディア

１)新発田中学発行の「学友会雑誌」

金塚はどのように調査し，研究を進めたのだろうか．1935年直前の平安越後古図論争につながる時期の金塚の調査や研究の状況について，1934年に「学友会雑誌」45号に書かれたエッセイ風の小文「巡礼余談」(金塚，1932，pp. 3-14)に興味深い記述がある．金塚はこの小文で，新発田中学に移ってからの1年間の調査の様子と研究成果について下記のように記している．

1. 新発田に転居したのち(1932年末頃)，古い自転車を入手し日曜日ごとに出かけた．遺物の表面採集調査などを行った．
2. 自転車には地形図をみるための見台を取り付けた．調査の便に役立つだけでなく地元の人々との会話のきっかけともなった．
3. 新発田の自宅から自転車で行ける範囲はほぼ行き尽くした(北蒲原郡周辺か？)．
4. 著名な郷土史家が言及し，各所で引用されている北蒲原郡の遺跡を訪ねたところ，遺物の存在が希薄で，文献のみに頼った研究に疑問を抱いた．
5. 6月上旬に，従来の定説では水面下とされている地点から土器を発見し，その後つぎつぎと標高の低い「低重地方」から遺跡を発見した．
6. 文献のみに頼って論を立てる方法を批判し，実地踏査の重要性を指摘．
7. 中蒲原郡・西蒲原郡の調査の必要性を今後の課題として挙げる．

この小文で金塚は毎週日曜日ごとに精力的に自転車で調査に出かけたと述べている(上記1)．「巡礼余談」の後段では，新発田に転居する前に刈羽郡で貝塚をみた経験なども語られているが(金塚，1932，p. 11)，金塚の研究を特徴づける蒲原平野を面的に捉える調査は自転車を活用するようになった新発田中学時代以降のようである．

また，自転車には地形図用の見台をつけ地形図を利用して実地踏査の成果を記録している(上記2)．佐藤は大正期に五万分の一地形図が当時の内地をカバーしたことが，地理を時代の要請に応える分野に仕立てた理由のひとつだったと指摘している(佐藤，1988，p. 29)．「巡礼余談」の中の地形図に関心をもった村人との会話のエピソードはこのような世相を反映したものであろう．金塚資料には，大正期から昭和初

年代に発行された地形図が数多く含まれており，多くの地形図には金塚の手による書き込みや着彩がある．地形図を用いて調査研究や教材作成を行っていたことがうかがえる．新発田図書館には金塚作成の遺跡分布図が所蔵されているが，この図は上述のような継続的な調査によって作成されたものと考えられる．

金塚は「巡礼余談」ののち「学友会雑誌」に三年にわたって新発田町の地形や歴史について俯瞰した「新発田概論」前・中・後篇を発表する．それぞれの篇の末尾には，謝辞が示されており，新発田中学校の同僚で歴史教諭の新井寛励や，新発田の郷土史家であり郷土研究社を経営する三扶誠五郎に感謝を示すほか，「生徒諸君の宿題に啓発された点も頗る大である」(金塚，1933，p.25)と，生徒への感謝も示されている．金塚は1936年2月より，新発田中学の生徒と連名で「郷土余談」という新発田周辺の民俗に冠する連載を新発田新聞に載せており，生徒が調査した成果を積極的に活用している．研究資料を公刊するのと同時に，生徒への教育的な効果も期待していたものと思われる．

2)雑誌「高志路」創刊と金塚の研究

金塚の回顧によれば，金塚の寄稿の経緯は1935年に新発田中学を訪ねてきた小林存と意見交換をし「誌友としての申込みを行うと共に「康平・寛治図偽作論」を書くお約束までした.」というものであった(金塚，1961)．

「巡礼余談」で金塚が名前を伏せて批判した著名な郷土史家は，当時の研究者には前後の文脈から大木金平を指していることがわかっただろう．小林存は創刊した「高志路」誌上で論争を起こそうという意図を持って金塚に寄稿をすすめたのではないかと推測される．

「高志路」に登場した金塚は平安越後古図論争の偽作説をとる新進の研究者として，『郷土史概論』において真作説を主張した大木金平(溝口，2000)と，誌上で論戦を繰り広げることになる(第4表)．大木金平は北蒲原郡の尋常小学校の教員を勤めた郷土史家で，1935年時点では下越地方の郷土史研究の主流であった．

1935年4月の村島靖雄の論考からじまった論争は，金塚の登場，大木の反論という展開で過熱していき，1936年2月号に掲載された金塚の「大木先生の貝塚論を読む」の文末に付された小林存の文章によって収束する．これらの論争の後，金塚の「高志路」誌上の活動は，新発田中学の生徒と連名で寄稿した「北蒲原郡を中心とせる民俗調査報告」(2巻5号より3回に分けて掲載)や，自らの民俗調査の成果をまとめた「地言葉と農民生活」(3巻10号より全25回掲載)など，主として民俗に関する調査報告になっていく．

3)連続投稿・連載という発表方法

「高志路」以外の媒体での活動では，先にふれた新発田中学の「学友会雑誌」のほか，1936年2月から新発田新聞上で「郷土余談」の連載が始まっている．これは新発田中学の生徒の作文と金塚自身の調査を整理し，1938年まで長期間にわたってコラム的に連載したものである．金塚資料にはその切り抜きと原稿の一部が遺されている．

「郷土余談」と「北蒲原郡を中心とせる民俗調査報告」に共通するのは，時代の「新陳代謝」によって多くの地域の歴史や民俗が変化しつつある状況にあるという時代認識と，民衆の生活に関する記録を作成しなければならないという使命感である．金塚はこれらの課題に新発田中学の生徒に報告や研究物を作文として提出させ，そのデータを整序して新聞・雑誌に発表するという手法を試みている．テーマごとに項目を立て，整序してあるとはいえ生徒の提出した膨大な量の作文をベースとするため，原稿も長大なものとなり，必然的に連載形式での掲載と

第4表 雑誌「高志路」創刊年に掲載された平安古絵図論争関連の記事

巻	号	寄稿者	タイトル	内容
1	4	村島靖雄	寛治偽図の作者と製作年代	偽作説を前提に作者を丸山兼術，製作年代を文政10年頃と推測
	6	金塚友之丞	康平図・寛治図偽作論	1.論究の動機／2.信用論と其の根拠／3.偽作論と其の根拠
		小林存	今号の執筆者披露	金塚の論考が「本社原稿用紙75枚の堂々たる長篇」で実地の検証にもとづく新しい方法論だと紹介
	7	金塚友之丞	康平図・寛治図偽作論	4.信用論の検討／5.偽作論の検討
	8	金塚友之丞	康平図・寛治図偽作論	6.総検討／7.結論
		小林存	本号執筆者紹介	松谷時太郎の寄稿した「長尾政景と野尻の池」を金塚の論考と並べ「こういう価値のある論文を陸続本紙に得ることは嬉しい」と評価
	9	金塚友之丞	的場山 (寛治図康平図偽作論補遺)	的場山(新潟市西区)の実地踏査の報告
	11	大木金平	康平寛治図は果して偽作なるか	文献調査を中心に偽作説を批判
	12	大木金平	康平寛治図は果して偽作なるか	貝塚につき調査
		金塚友之丞	大木先生の学説動向「康平寛治図は果して偽作なるか」を評す	11号に掲載された大木の論考を批判
		小林存？	編集局より	「…大木金塚の一騎打ちの論戦これお地方地歴学会に一大衝動を与うるもの，今回は金塚君の反撃である」
2	2	金塚友之丞	大木先生の貝塚論を読む	大木の反論に対する再反論
		小林存	付記	1巻12号に金塚・大木の論考が併載された経緯について説明．あわせて柳田国男の助言も付して論争の収束を示唆

「高志路」掲載論文より，岩野作成

なっている．

金塚は調査研究成果の発表方法として，独立した論考を寄稿する一般的な方法に加えて，資料集に近い膨大なデータを含む論考を新聞・雑誌に連続投稿する方法を多用している．主著『蒲原の民俗』にまとめられた論考も，長期間にわたって「高志路」に掲載されたものを後進の研究者がまとめたものである．

こういった発表方法は1936年「郷土余談」や1937年の「地言葉と農民生活」で用いられている．金塚以外の「高志路」の寄稿者の論考も，連続して掲載されているものが多く見られることから，金塚が在野の研究者として登場した時期には，新聞・雑誌メディアが歴史文化に関する論考を連続して掲載する形式が一般的であったことがわかる．

この時代の新聞・雑誌は出版された都市，県の読者という限定された読み手に向けて発行されている性格が強い．「高志路」は創刊当初は，小林存が主宰する高志社が発行する商業誌としての性格を持ち，新潟県の読者を対象とした郷土史研究の総合誌という限定された性格にもかかわらず月刊誌として発行されていた．月刊ペースで発行が可能であったのは，主宰する編集者の能力や魅力が欠かせないのはもちろん，充分な質と量の論考を寄せてくれる寄稿者の存在，そしてそれらを読む読者層が存在していたことによる．

小林存の編集後記などの文章では，金塚には「高志路」の研究や学術的な質を高める役割が期待されていることがうかがわれる．この時代には民俗調査報告書や市町村史の民俗編のよう

な刊行形式は一般的ではなく，学術的な資料を発表するには，単著として発表するか，雑誌に連載するよりほかに方法はなかった．

安定した原稿の供給と学術的な価値のある資料の発表という二つの需要に応えるため，金塚は長期連載形式による論考の発表という方法を採ったのではないと考えられる．

Ⅳ おわりに

１．昭和戦前期の中等教育と在野研究

本稿の作業を通して，従来別々に論じられてきた大正期から昭和戦前期における新潟県の中等教育の拡充と，同時代の地域を対象とした在野研究の活性化が密接に関係していることが見えてきた．

中学校，実業学校の教員である金塚友之丞や新井寛励，あるいは中学校から転じて郷土博物館に籍を置く齋藤秀平，松谷時太郎といった中等教育関係者が，それまでの郷土史家とは異なる新しい手法を在野の研究に導入した．また，研究者間の結節点として「高志路」をはじめ，新聞や学校関係の雑誌などの印刷メディアが調査研究の成果を発表する新しい場所として機能していたことも明らかとなった．こういった場では，従来郷土史家が用いてきた文献中心の研究と，実地踏査や聞き書き調査などの新しい手法を用いた研究が攪拌・活性化され，論争が発生したり，あるいは新しい研究者のネットワークのきっかけともなった．「高志路」の場合は同時期に確立期にあった民俗学の研究者ネットワークとの関係を深めていった．それらの動きは，商業ベースの新聞，週刊紙，月刊誌といった頻繁なペースで研究者さらには一般読者に紹介されていた．

２．課題と展望

本稿では，中等教員として勤務するかたわら在野の研究者として活動した金塚友之丞の戦前期の研究を通して，この時期の中等教育と在野研究の関係を見てきた．新潟市歴史博物館所蔵の金塚資料によって，このような研究が可能となったが，一方で同時代に活動していた多くの在野の研究者の動きを把握できたわけではない．今後は新聞記事や教育関係の資料などを掘り起こし広く調査する必要がある．

また，同じ時期に他県で生じていた動きや，関東，関西など高等教育機関が存在していた地域の動きなどと比較することで，一地域だけではなく日本における在野の研究の状況が把握できるものと思われる．

最後に，昭和戦前期の在野研究をめぐる研究環境を今日のそれらと比べて，今日的な課題と展望を探ってみたい．

両者を比較した場合，まず大きく異なっているのは，今日の社会は，研究環境の面で大学などの高等教育機関をはじめとして県内の教育機関が格段に充実している点である．また社会教育機関も充実し，特に1970年代以降，博物館・資料館などが地域に設置され，それまで蓄積されてきた調査研究の成果を常設的に公開できる環境が整った(第5表)．市町村史誌編纂事業も多くの自治体が行っている(第6表)．各時代の資料を参照するための利便性は，戦前期に比べてはるかに充実した．

2010年代に入ってより顕著なのが，地域の歴史や文化を魅力ある地域づくりの核として発信し活用しようとする動向である．このような動きは，それぞれの地域で育まれた歴史や文化を積極的に発信し，交流人口の増大や移住の促進などにつなげ，地域を活性化することを目的としている．日本各地の市町村や都道府県などの

第5表 現新潟市域の博物館資料館の開館年

区名	旧市町村名	館名	開館年
北区	豊栄市	北区郷土博物館 (豊栄市博物館)	1968年
中央区	新潟市	新潟市歴史博物館	2004年
		(新潟市郷土資料館)	(1972年開館)
江南区	亀田町	亀田郷土資料館	1994年
秋葉区	新津市	(新津鉄道資料館)	1983年
南区	白根市	白根大凧と歴史の館	1994年
	月潟村	月潟村郷土物産資料室	1990年
	味方村	旧笹川家住宅	1983年
西区	黒埼町	黒埼常民文化史料館 (新潟市文化財センター)	1972年
西蒲区	潟東村	潟東村歴史民俗資料館	1991年
	岩室村	岩室歴史民俗資料館	1988年開館 (2009年リニューアル)
	中之口村	中之口資料館	1994年
	巻町	巻郷土資料館	1974年

岩野作成

第6表 現新潟市域を対象とした市町村史誌と刊行時期

自治体名	シリーズ名	刊行年	冊数
新潟市	新潟市史	1990～1998	18
黒埼町史	黒埼町史	1990～2000	8
新津市	新津市史	1986～1994	8
白根市	白根市史	1 985～1989	7
豊栄市	豊栄市史	1988～1999	5
小須戸町	小須戸町史	1983	1
横越町	横越町史	2000，2003	2
亀田町	亀田町の歴史	1988～1990	3
西川町	西川町史考		
味方村	味方村誌	2002	1
潟東村	潟東村誌	1989	1
月潟村	月潟村誌	1978	1
中之口村	中之口村誌	1987，2006	2
岩室村	岩室村	1972	1
巻町	巻町史	1988～1994	8

岩野作成

地方自治体はこういった動きの重要な担い手として各地でさまざまな施策を試みている．

筆者の勤務地である新潟県新潟市でもこのような動きは活発である．そして地域の歴史や文化を地域活性化の核として活用しようとする動きの中で，平成の大合併で新潟市域に位置することとなった各地の博物館や資料館が行ってきた調査研究や，合併自治体の市町村史誌編纂の成果が積極的に発信され，さまざまな場で活用されている．本稿で概観してきた戦前期の在野の研究活動は，地域の文化資源の鉱脈としても注目されている．

歴史文化を活用しようとする動向はそれまで地域に暮らす多くの人々の関心の対象とはならなかった多種多様な歴史や文化が再発見される機会となっている．しかし，歴史文化の活用に当てられる社会的コストが拡充されているのに比べて，調査研究に割かれるそれらはさほど重視されていない．そのため，従来の調査研究の成果に基づき，継続的な調査研究を積み重ねて

いくサイクルは充分に構築されているとは言い難い.

戦前期の下越地方で生じた中等教育機関，社会教育の拡充にともなう在野の調査研究の新しい展開と，印刷メディアによるそれらの発信，ネットワーク化のような質的な変化を促すような環境は，今日的なかたちでは充分に構築されていない．今後は，それぞれの地域において，文化資源としての歴史文化を活用を模索すると同時に，継続的に調査研究し，新たな知見を得るサイクルを構築していくことが課題となるのではないか.

謝辞

古田先生の退職記念号ということで何より驚いたのは私が先生の指導を受けていた頃から20年以上の歳月が流れているということでした.

修士課程への進学に際して，ぼんやりと民俗学をやりたいと考えていた私を古田先生が面倒見てくださるということになり，いろいろ不出来な院生であった2年間，先生にはいろいろご面倒をおかけしました.

民俗誌をめぐる論争をテーマとした修士論文をなんとか仕上げて新潟大学の博士課程に進学できたことや，その後博物館の学芸員として職を得ることができたのも，先生の厳しいご指導あってのことだと感謝しています.

先生の今後のますますのご活躍を願っています.

注

1) きんづか・とものじょう，1890～1972年．金塚の名前は戦前期までは「友之亟」が多く，戦後は「友之丞」も併用される．またごく少数であるが「友之悉」の表記もあり，合計三つの表記が併存している．現時点では，各図書館の書誌等でも統一されていない．本稿では「友之丞」に統一した.

2) 千葉徳爾は「土地条件と農民文化」において新潟県下越地方の低湿地文化について考察しているが，その資料の多くを本書にまとめられた資料に負っている(千葉，1977)

3) 2004 年オープンの常設展示の「水にいどむ」のコーナー．2009年夏期企画展示「蒲原平野の20世紀」，2011年夏期企画展示「開墾の技術史」，2015年春期企画展「田んぼで魚採り」など多数.

4) 資料収集や調査研究の成果は，2014年の冬季企画展「謎の古地図―新潟平野が海の底か!?―」で公開された.

5) こばやし・ながろう，1877～1961年.

6) 新潟市歴史博物館 博物館講座「博物館と民俗学－新潟市域の博物館の歴史を事例として－」(2011年1月23日)，「蒲原平野の開墾技術(2)―低湿地文化をめぐる研究前史―」(2011年8月28日)

7) 現時点での金塚資料の調査による最大の成果は，それまで文字記録によってしか示されてこなかった出土遺物の実物が，資料に大量に含まれていたことにより，具体的な調査が可能になった点である．これが先に述べた牡丹山諏訪神社古墳の発見につながった.

8) 『北条町史』によれば，1887年6月から1900年11月までは尋常科東長鳥校と簡易科西長鳥校が分立し，1900年11月に合併，長鳥尋常小学校が認可された(p. 604).

9) みぶ・せいごろう，生年不詳～1961年.

10) 第二次世界大戦後，1953年，図書館法を受けた新潟県立図書館設置条例により，「新潟県立新潟図書館」と改称．1992年に現在の女池に移転し，新潟県立図書館と改称.

11) やまなか・きこり，1882～1947年.

12) 県会議事堂は，小出倉庫，新潟税関とならんで保存すべき文明開化期の建造物と認識さ

れている.

13)金津村(現新潟市秋葉区金津)の資産家で石油事業に成功し，財を築いた中野貫一(1846-1928)より県に寄せられた100万円を資金に1919年6月に創設された育英事業団．主として中等教育についての育英事業として，有用の人士に対し学資の貸与または給与を行う．1919-1929年までの貸給費生の合計は1545人．高等教育よりも中学校，盲唖学校の対象者が多くあったことが特色．育英事業のほか，図書館事業や博物館事業の支援も行った．財団の事務所は県庁内に置かれた.

14)新潟県教育百年史編さん委員会・新潟県教育委員会(1970)：『新潟県教育百年史　大正・昭和前期編』，pp. 791-792.

15)1908年創刊.

参考文献

岩野邦康(2013)：ジャーナリストとしての小林存と『高志路』創刊の頃．高志路，389，pp. 11-28.

越佐教育雑誌(1910)：教員検定成績発表．越佐教育雑誌，205，p. 51.

北条町史編纂委員会(1971)：『北条町史』北条町，702p.

金塚友之丞(1932)：巡礼余談．新潟県立新発田中学校学友会雑誌，44，pp. 3-14.

金塚友之丞(1933)：新発田概論　前篇．新潟県立新発田中学校学友会雑誌，45，pp. 1-25.

金塚友之丞(1934)：新発田概論　中篇．新潟県立新発田中学校学友会雑誌，46，pp. 26-58.

金塚友之丞(1935a)：新発田概論　後篇．新潟県立新発田中学校学友会雑誌，47，pp. 3-52.

金塚友之丞(1935b)：康平図・寛治図偽作論(上)．高志路，1(6)，pp. 6-10.

金塚友之丞(1935c)：康平図・寛治図偽作論(中)．高志路，1(7)，pp. 7-13.

金塚友之丞(1935d)：康平図・寛治図偽作論(下)．高志路，1(8)，pp. 6-13.

金塚友之丞(1961)：小林先生と「高志路」．高志路，別冊，p. 10.

金塚友之丞(1970)：『蒲原の民俗』野島出版，323p.

佐藤由子(1988)：『戦前の地理教師－文検地理を探る』古今書院，168p.

千葉徳爾(1977)：土地条件と農民文化．『地域と民俗文化』大明堂，pp. 61-98.

寺崎昌男・「文検」研究会編(1997)：『「文検」の研究－文部省教員検定試験と戦前教育学』学文社，443p.

越佐教育雑誌社編(1926)：『大正15年新潟県学事関係職員録』新潟目黒書店，296p.

新潟県教育百年史編さん委員会・新潟県教育委員会(1970)：『新潟県教育百年史　明治篇』新潟県教育庁，1479p.

新潟県教育百年史編さん委員会・新潟県教育委員会(1973)：『新潟県教育百年史　大正・昭和前期編』新潟県教育庁，1514p.

新潟県立新潟図書館(1965)：『新潟県立新潟図書館50年史』新潟県立新潟図書館，248p.

北条町史編纂委員会(1971)：『北条町史』北条町，702p.

堀健彦(2008)：明治中期の新潟県郷土雑誌と越後古図．資料学研究，5，pp. 1-25.

堀健彦(2010)：平安越後古図の分類試論，資料学研究．7，pp. 1-26.

牧田利平編(1972a)：『越佐人物誌〈上巻〉(1972年)』野島出版，531p.

牧田利平編(1972b)：『越佐人物誌〈中巻〉(1972年)』野島出版，532p.

松谷時太郎編(1941)：『新潟郷土博物館　館報』新潟郷土博物館，1，62p.

溝口敏麿(2000)：書評 大木金平『郷土史概論』《復刊》．新潟史学，44，79-80.

文部省(1931)：教員検定第53回師範学校，中学校，高等女学校教員検定本試験合格者．文部時報，368，p. 63(日本図書センター，1981復刻)．

山中樵(1924)：『明治天皇聖蹟誌』中野財団，522p.

山中正編(1979)：『木山人山中樵の追想－図書館と共に三十六年』山中浩，255p.

Secondary Education and Non-academic Studies in the Kaetsu Area of Niigata Prefecture， Showa prewar period，
- Case of the Geography Education and Folklore Study of Kindzuka Tomonojo-

IWANO Kuniyasu *

keywords： geography education， secondary education， non-academic studies， folklore study

*Niigata-City Niitsu Railway Museum